バルブマン

ぬじゃわきし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バルブマン

【Ｎコード】
Ｎ２３０１Ｍ

【作者名】
ぬじゃわきし

【あらすじ】
時は近未来、世は混迷を深め、戦争が勃発し、秩序が乱れ、悪がそこらに蔓延る有り様となった。一般市民らはそれに怯え、悲鳴を上げてばかりいた。
だが、そんな乱世に一人のヒーローが表れた。その名もバルブマン！

第一話…茸に身を売った男

何て事ない銀行。そこに強盗が現れた。悲鳴が満ち満ちた。強盗は銃を向けて叫んだ。

「命がおしければ手を上げて伏せろ！ほら、貴様！金を袋につめろ！大丈夫、もう少ししたら終わる…」

その時強盗の背後から「ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ」と高笑いが聞こえた。「何者だ！」と後ろを振り返ると、そこに頭部は電球、青いコスチュームに赤いマントと言う異様な男が立っていた。男は叫んだ。

「私の名は、バルブマン！悪者め！覚悟しろ！」

強盗は銃を向けたが、次の瞬間バルブマンの頭の電球がカッと煌めき、強盗とその場に居合わせた客達は目を押さえて苦しみだした。その隙にバルブマンは強盗に宙返りで急接近してあっという間に一つの塊にした。

そして隠れていた銀行支配人が現れて、強盗に渡すつもりだった金の袋を差し出してお礼を言った。

「ありがとうございます。お礼に…」

「いやいや、礼には忍びない。諸君、ではさらば。」

再びバルブマンは電球を光らして姿を消した。銀行支配人は光に射たれた目を押さえて苦しんでいた。

場所は変わってとある研究室。松　茸夫（マツタケオ）は悩んでいた。研究資金が足りなくなり度重なる借金を重ねるうちに限界に達しつつあったからである。そこで人に頼んで銀行強盗させたが、彼らはバルブマンに殺されたと聞いた。

松は、茸を研究していた。美味しく、さらにコスト削減のため繁殖力の良い茸と言うのを開発していたのである。試作品は出来たのだが、資金が足りなくて検査すらできない。

松は自棄になった。いっその事、と博士は試作品の茸のケースを開け、茸をピンセットで千切り、茹でて、醤油に和えて食べた。なんと芳醇で美味な味。これは繁殖してあげるべきだ。
ふと、松は右手の親指に妙な不快感を感じた。見るとイボがあった。なんだこのイボと感じた次の瞬間、痛みと共にイボから白い細い糸が数本生えてきた。わわ、と驚いた次の瞬間、糸が伸びて右手右腕全身にまで絡みついてきた。松はあの茸の胞子が着いたのだと察した。研究は確かに成功であまりにも繁殖力が良すぎて、松の身体は菌糸まみれになった。その内菌糸が神経に達して激しいキーンと言う痛みに襲われ、ああ、俺の人生はおしまいなのか…と諦めと覚悟を感じながら彼の意識は落ちた。

だが彼は生きていた。目覚めると研究室内は茸に満ちていて、それぞれが呼吸していた。俺は死んでいないのか…と松は辺りを見回した。戸口で茸を生やして横たわる職員を発見した。そして松の視線は窓に行き、窓に映る自分の姿を見た。

全身が茸のかさに覆われていた。

ぎゃっと松は悲鳴を上げた。そして夢中で茸に覆われた左腕を掘った。だが掘っても掘っても、茸の茎で、やがて左腕は貫通した。自分は全身が茸になってしまったのだ…衝撃と共に疑問が。ではなぜ、あの研究職員みたいに死ななかったのだろうと。だがすぐに答えが出た。自分は元々自分の作った茸の繁栄を願った。そしてこの茸も繁殖力が強い以上、自らの繁殖を強く願っている。いわば利害が一致したのだ。そこで両者は合体した。
その結論を経て、松は思った。自分は人間としてはもう駄目だ。こんな姿では誰も話してくれない。では自分は人間ではなく茸なのだ。
では茸の意志に従うのみだ。
そう考えた時松は発狂して高笑いし、全身がもろもろに崩れた。

そして、ある道路。人々は口々に言った。
「なんだ？これは。」
「茸…だね…」
「食べれるのかな？」
「やめなって、ほら、やめな…あ！」
「うわあ！」
道路の茸を掴んだ途端、その会社員は全身から茸を大量に生やして倒れた。会社員は服を残して分解された。
「きゃあ！」
「なにこれ！」
「逃げろ！」
「まって！あれはなに？」
女の子が指差した先には茸の郡体の上に人の形をした茸の塊があった。一瞬目玉が見えた。
「あれは…」
「あいつが原因だ！茸怪人め！」
そう叫んで、ある老人が、タバコを茸に投げ捨てて燃やそうとした。それを察した茸怪人＝松茸夫は、全身を崩して一気に老人に伸び、老人を餌食にしようと襲いかかった…

その時シュッと言う音と共に先端の茸が切り落とされた。松はぎああと叫んで身体を縮めた。そして人型に戻って「何者だ！」と言うと、答えが聞こえた。

「私の名前はバルブマン。平和を脅かす化け物め！覚悟しろ！」
そう叫んでバルブマンは飛び蹴りをした。頭に命中し、ぼこっと松の頭は取れ落ちた。バルブマンはさらに容赦なく、松を粉々に粉砕した。

だが、別の茸から再び松茸夫が生えてきた。
そう、松と茸は一心同体で、茸が生きている限り怪人は死なないのだ。それに気づいた時、バルブマンは閃いた。彼は閃くと頭の電球が点滅する。茸を一辺に破壊すればいいのだ。

だが、
「ははっ、愚か者めが。」
そう言って松は他の茸を集めて徐々に巨大化した。
「お前も餌食になるのだ！」
そう言って無数の茸がバルブマンに向かって襲いかかった。バルブマンはあっという間に茸に覆われ、茸怪人の塊に取り込まれていった。バルブマン危うし！

だが、すぐに松は妙な事に気づいた。
「なぜだ！なぜ、寄生されない！」
バルブマンは笑い出した。
「ふふふ、私は昔兵士だった。戦争で脳味噌以外全て死んだ。そこで私はサイボーグ手術をしてもらい、今の姿に甦った。私の唯一の生物の部分は、今私の胸の内に電極に繋がれながら厳重に保管されている。貴様の茸なんか入るわけがない。」
「なんだと…そんな訳は…ない…」
「しつこいやつだ、こうなったら、ボム！」
次の瞬間バルブマンの身体から衝撃波が飛び出し、松の茸は殆ど粉砕され、道路にも大穴が開いて水道管から穴に水が溢れ出て湖になった。
バルブマンは湖の周辺に着地し、人間姿の松が湖に落ちた。バルブマンはチャンスとばかりに湖に手を突っ込んで叫んだ。
「放電！」

ずばばばばずばば

松茸夫は水中でもがき苦しんだ。それは長いこと続いたが、やがて、水温が上がり初め、松は身体が硬くなりつつある事に恐怖を感じた。やがて彼は動かなくなって、人型のまま煮え、水中をぷかぷか浮いていた。

バルブマンは人形茸を救い上げ、各部位に切り分けて人々に与えた。人々は一斉に食べたがそれは大変美味だったらしい。松の実験は成功であった。

第二話…死の痒み

仕事を終えたバルブマンは、誰も知らない自宅に着く。そして頭の電球をきゅっきゅっと回して外し、戸棚に置き、首なしのまま「はあ」とため息をついてくつろいだ。そして自分のした事を回想した。つい最近、怪人キノコマンを退治した。信号渡れなくて困っていた老人を助けた。さっきまでポイ捨てした輩を焼き殺した。
ここで補足しておくと、バルブマンは頭が電球になったせいで、正義感こそあっても人間性は完全に損なわれていた。だから悪人への制裁はどこまでも過激であった。

話変わってある家。水野虫男と言う会社員の男性が住んでいた。彼は名前のごとく、水虫に悩んでいた。そもそも部屋中に水虫の原因である白癬菌（ハクセンキン）が蔓延してるのか、塗り薬を塗っても無駄であった。しょっちゅう皮が剥け、その事で毎日虫酸が走っていた。

だが、ある夜、部屋の中で呼び声が聞こえた。
《…水野よ…水野よ》
水野は「誰だ！」と叫んだ。返事が返ってきた。
《我々は、エドボリアン星から来た、言ってしまえば侵略者だ。》
変質者かなんかと思い水野は「どこにいる！」と叫んだ。
《エドボリアン星人は、地球の白癬菌と同じ。彼らから進化したのが我々だ。》
はっとして水野は足の水虫を見て叫んだ。
「お前か！」
《いかにも。我々は皆と違って知能のある水虫だ。そして大食漢だ。そこで効率的に食べる方法を考案した。お前は、住まわせた礼として、私の奴隷となるのだ！》

突然全身に傷みが走った。むず痒さも増した。水野はうめきながらのたうち回った。
「うわ、うわわわ！あああ！」
しばらくしてそれはすっと引いた。どうなったのだろうと鏡を見たが、顔に変化はない。やがて彼は手がやや痒い事に気付いた。手のひらを眺めた。
「わっ！」
手のひらがひどい水虫になっていた。なんだ…これは…と思いながら両手を震わしていると、両手の平の間に電流が走った。水野は再び驚いた。両手を近付けると相互の水虫間で放電するのだ。水野はしばらく呆然としていた。

その夜から彼はむず痒さに悩まされた。手や足、胸の内までむず痒いのだ。それにより眠れなくなった彼はしだいにストレスを貯めていった。

次の日もそれは続いた。水虫が酷すぎてつり革に捕まるのも痛かった。
友達も「どうしたの？」と訊ねたが「水虫がひどくなった」と普通に答えた。塗り薬を進められたが、とっくにその薬は塗りまくったが治る様子すらない。むしろひどくなる一方だ。

ある日職場に向かうために大都会の街中を彼は歩いていた。人々は普通に歩いていたが彼はそれどころじゃなかった。痒くて痒くて仕方ないのだ。ストレスは徐々にたまり、いらいらむずむずとし、ついにそのストレスは最高潮に達し、発狂レベルにまで行こうとした時、突然両腕が独りでにぎゅん、と動いた。あっと思った次の瞬間、水虫の手の平から白い光線が放たれた。その光線は会社員の誰かに命中し、会社員は倒れた。その会社員が起き上がった時、全身が水虫で真っ白になっていたので皆悲鳴をあげた。会社員はどうしたの

かと見回したが直後に「痒い痒い痒い！」と全身を掻きむしった。
掻いてくうちに全身は水虫の皮のようにばらばらに散り、会社員は背広を残して跡形もなく消滅した。

「わあ！」「きゃあ！」

と悲鳴が上がった時、両腕がぐずずずずと悲鳴のある方に向かって動いた。水野は「やめろ！」と叫んだが、腕と足はすでに水虫に侵されていたため、勝手に走り出して追いかけた。人々は悲鳴を上げながら逃げたが水虫光線に当たってあえなく白く散った。水虫光線を発しながら水野は「止めろ！止めろ！」と腕や脚に叫んだが、言うことを聞かなかった。次々と「痒い痒い！」とその異常な痒みゆえに人々は自滅していく。

その時「ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ」と高笑いが聞こえた。振り向くと、バルブマンが立っていた。
「私は正義の味方！バルブマン！水虫を操るハクセンマンめ！覚悟しろ！」
バルブマンは迫ってくる。水野はバルブマンに狙いを定めながら叫んだ。
「待ってくれ！水虫が僕を操られてるんだ！水虫が、ぐわっ」
水野の顔に水虫が迫り、顔が真っ白になった。水野は意識を失い、代わりに水虫の意思が表れ、水野はくわっと表情を変えて叫んだ。
「がははは、バルブマンとやら、死ぬがよい！」
そして水野は水虫光線を出した。それを避けながらバルブマンは状況を理解した。水野は悪ではないから殺してはならない、彼は水虫に操られてるのだ。では、とるべき手段は…バルブマンは閃いた。
彼は閃くと頭の電球が点滅する。彼は叫んだ。
「強力フラッシュ！」
バルブマンの電球から熱線が発せられ、水野はそれをもろに浴びた。

水虫だった皮膚はあっという間にひどい大火傷になり、そのまま仰向けに倒れた。水野は瀕死だが生きている。任務完了とバルブマンは溜息し、ガラスの額を拭った。

第三話　ワキの毛襲来

「我々のためにバルブマンを倒さねばならぬ！」
モーターマンはそう怒りながら言った。彼は今日も蝶ネクタイにスーツに着こなしている。
「だが、私が闘うのはまだ先の話だ。私が死んだら大勢の者が困る…だが、名乗り出る者はいるかね？」
モーターマンはそう訊ねながら皆を眺めた。だが、誰も手を上げない。
「ほう…怖じ気ついたか。だが倒した者にはこの上ない褒美をくれてやるが…」
皆はモーターマンに怯えながらも手を上げない。彼の首から上はモーターなので表情が読めない。しかし、怒りだけはわかる。なぜならモーターマンは怒ると頭のモーターが回転し始めるからだ…
「貴様ら、なんて臆病なんだ！」
きゅるきゅるとモーターを回転させながら彼は怒鳴った。
「仕方ない、指名しよう。猪田！」
「はい！？」
猪田と呼ばれたその男性は驚き、答えた。
「えええ、でも、私は…」
「断ると言うのか？」
モーターマンの回転が一気に早まった。
「いえ、違います！私はバルブマンに立ち向かうだけの力がありません…」
「安心しろ、君には強化手術ＹＫＧを行う。」
「ＹＫＧ…？」
突然、モーターマンの腹心の部下、トランジスターたちが現れ、猪田の体を押さえつけた。
「わあ！」

トランジスターは猪田の体に注射をし、猪田から去った。
しばらくして、猪田は立ち上がった。何も起きない。不思議に思って彼は訊ねた。
「モーター閣下…何が変わったのでしょう…」
「肩を上げたまえ。」
猪田は肩を上げた。そのとたん、信じられない現象が起きた。猪田のワキ毛がものすごい量でワキから長々と伸び、触手のように蠢いた。
「わあ！」
猪田は怖くなってワキを締めた。するとワキ毛はもとの長さに縮まり、収まった。モーターマンは言った。
「…訓練すれば君はワキ毛を自在に操るようになる。そしてバルブマンを倒しに行くのだ！ワキゲマン！」
「はい！」
ワキゲマンの称号を与えられた猪田は目に喜びを湛えた。

その日、一人の女性、鹿子は、電車でつり革にぶら下がっていた。鹿子は周りを見回した。椅子には居眠りするおじいさん、右にはゲームをする子供、左には、サングラスを着け、シャツを着た男性がつり革に掴まっていた。タンクとのシャツなので、中のワキ毛が見え、きもちわるっ、と鹿子は目を背けようとした。
だが視界の隅で異様な事に気付いた。ワキ毛が動いている。そんなまさか。有り得ない。
だが次の瞬間、サングラス男性のワキ毛が鹿子を襲撃した。
「ぎゃあああ」
長い多いワキ毛は鹿子に絡み付き、鹿子を食いつくし、やがて骨になってワキ毛からどさっと落ちた。

皆は悲鳴を上げた。サングラス男―つまり猪田―は周りをぐるりと見渡し、「ははははは」と笑いながら両腕をゆっくり上げた。たちまち電車は悲鳴と毛で埋め尽くされた。

電車は止まった。扉は開き、ワキゲマンはにやりと笑いながらホームに出た。蠢くワキ毛を見てホームの人びとは悲鳴をあげた。ワキゲマンはゆっくり両ワキを上げようとした…

その時。

「そこまでだ！」

ワキゲマンは振り返った。なんとようやくバルブマンが現れたのだ！人びとは感謝の思いでバルブマンを見た。

ワキゲマンは笑った。

「ふはははは、俺に勝てるかな。」

そしてワキからワキ毛の先がぽとん、と落ち、そしてまっすぐワキ毛がバルブマンに伸びた。咄嗟に避けたが、ワキ毛がホームの壁を貫いた。

「姑息な手を使う…」

バルブマンがそう呟いた時、ふたたびワキ毛がぎゅんとバルブマンに伸びた。バルブマンは叫んだ。

「バルブフラッシュ！」

頭の電球が煌めき、その場で見ていた傍観者は皆目を潰した。それらを見てバルブマンは良し、と思った。これならワキ毛男も目を潰して、ワキ毛は命中しない…

だがワキ毛はまっすぐバルブマンに襲いかかり、バルブマンの左腕と右脇腹を切り落とした。

「ぎああ！」

「ばかめ、そんな技は対策済みだよ…」

ワキゲマンは笑って、サングラスをかけ直した。
「畜生！」
バルブマンは走り出す、が、ワキゲマンは今度は頭の電球を貫いた。
電球は割れ、バルブマンは力を失い倒れた。
ワキゲマンは光線銃でバルブマンの胸を撃った。装甲が壊れ、中身が露になった。
バルブマンの胸には大きな核（コア）があった。なんとそれは、バルブマンの脳が入っている場所！ワキゲマンは右のワキ毛と左のワキ毛を交互に、コアにぶつけていった。このままでは死んでしまうが、頭が割れてて力が出ない…

その時
「バルブマン！新しい頭だよ！」
ダイオードちゃんがやってきて電球を投げてきたので、バルブマンは残った右腕で受け止め、電球を入れ替えた。電球はピカッと光った。
「元気万倍バルブマン！」
そしてコアを攻撃したワキ毛を掴み、ワキゲマンをこちらまで引っ張っていった。そして勢いよく蹴ってワキゲマンをホームの端までぶっ飛ばした。ワキ毛が千切れた。バルブマンが握っているワキ毛を切断された左肩につけると、なんとみるみる左腕がワキ毛によって再生された。
「すごい…」
とダイオードちゃん。

バルブマンは吹っ飛ばされて起き上がったワキゲマンにむかって走り、「強力電撃パンチ」と叫んで、手に電気をため、ワキゲマンの鳩尾にパンチした。
「ごふうっ」

ワキゲマンは腹を押さえた。腹が燃えている。
「わぁぁぁ」
と叫んで急いで火を消したが腹はすっかり灰になり、ぼろぼろと落ちて穴が開いた。

「あ！」
バルブマンは叫んだ。信じられない光景だ。穴の開いた腹の向こうで大量の毛が蠢いていたのだ。そう、彼の中身は全てワキ毛になっていたのだ！ワキ毛はうめいた。
「ぐぐぐ、こうなったら仕方あるまい…」
全身がばらばらになり、ワキ毛は襲いかかった。
バルブマンはとっさに逃げた。ワキ毛はあまりにも早く、反撃する暇もない。

…とその時、階段から人が現れた。会社員で電車の乗客として来たつもりだが、あまりの光景に固まった。こいつは、使える、とバルブマンはその会社員をつかみ、ワキ毛達の前に投げつけた。たちまちワキ毛は会社員に喰らいついた。
「んぐあああああ、たすけてくれえええぇ！」
その隙に、とバルブマンは頭の電球をかざし、叫んだ。
「スーパーフラッシュ！」
パンと光り、周りの何もかもが燃えた。毛は悲鳴を上げながら燃えた。こうして駅のホームはバルブマンとダイオードちゃんを除いて全て灰になった。

「う…ぐぐぐ…」
バルブマンは呻いた。髪の毛で作られた左腕がどろどろと融解していた。ダイオードちゃんが消毒用エタノール溶液を左腕にかけると、ジューと音をたてて、湯気が出た。そのまま左腕は溶けた。
「今度修理しなきゃね。」

「そうだね…頼むよダイオードちゃん。」
「はい！」

「そうか、奴は負けたか…」
「焼きつくされました。」
「相変わらず残虐だな。人殺しめ…」
モーターマンが言った。すると手下が言った。
「しかし生存者がいました！」
「だれだ？」
そして運び込まれた。ワキ毛に襲われバルブマンに焼かれた会社員であった。会社員は叫ぶ。
「バルブマンめ！絶対ゆるさぬ！」
モーターマンは内心ほくそ笑んだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2301m/

バルブマン

2010年10月15日23時58分発行